

Title	現象学とE・レヴィナスの思想
Author(s)	板倉, 代志彦
Citation	哲学論叢. 1989, 20, p. 45-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66864
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現象学とE・レヴィナスの思想

板 倉 代 志 彦

フッサールとハイデガーに代表される古典的な現象学を思索の基盤に据えながら、早くから受動的綜合の問題、相互主観性の問題をひとつのラディカルな仕方において探究していったエマニュエル・レヴィナス（一九〇六〜）の哲学は、近年各方面に種々のインパクトを及ぼしつつある。本稿は、二つの独創的な著述⁽¹⁾に至るまでの礎石となった、初〜中期の重要な論文に光をあて、レヴィナスの思想の中で現象学が果たした役割をめぐって——とりわけフッサールの現象学との関連において——一連の考察を試みようとするものである。

一 『フッサール現象学における直観の理論』の公刊（一九三〇）まで

——相互主観性とヒュレー的所与の問題

レヴィナスがフランスにおいてJ・ヘーリンクのもとで現象学研究に着手したのは一九二七年のことであった。一九二八年夏学期からフライブルク大学哲学科に留学し、フッサール、ハイデガーの講義、セミナーに参加、帰仏した翌一九二九年には、処女論文「エドモント・フッサール氏の『イデーネン』⁽²⁾について」を発表している。この論文に

において、すでに「自我論的還元」は「相互―主観的還元」の前階梯として把握され、「自我論的現象学は唯一真理と現実の意味を汲み尽くしうるものである『相互主観的』現象学に従属しなければならない」と述べられていることは看過されることができない。⁽³⁾ 何故ならばこのことは、一九二九年二月にソルボンヌで行われた『デカルト的省察』の内容の講演に前後して、彼が現象学における相互主観性の問題の根本性を十分に把握していたという事実を明らかにするからである。『デカルト的省察』では、超越論的哲学としての現象学の成否の問題の鍵が、相互主観性の問題にあることが明瞭となる。そして同じ問題は、今日超越論的哲学の構想そのものや、フッサールによる相互主観性理論の問題点をめぐって、一九七三年のフッサール全集『相互主観性の現象学』三巻の出版以来、再び現象学者たちの間で活発な議論の焦点となっている。レヴィナスの取り上げる諸問題がその最初期以来、たとえ一見その都度の主題としては細かい局面に限られているように見えようとも、絶えずこの大きな問題への関心によって貫かれたものであるとすれば、このことは彼の現象学研究の展開をあとづけていく上でも重要な観点としてまず配慮されなければならないことになろう。

さて、同じ一九二九年にストラスブール大学に提出された博士論文『フッサールの現象学における直観の理論』⁽⁴⁾は、当時公刊されていたフッサールの諸著作を典拠とし、主として『論理学研究』、『イデー』第一巻、『内的時間意識の現象学講義』までの諸著作を論じたものである。翌三〇年、転学先のソルボンヌ大学の教授であったレオン・ブランシュヴィックの推薦のもとにフランスの倫理政治学アカデミーによって賞を受けたこの書は、後にサルトルを現象学に導く機縁ともなった著作として知られている。

ここでレヴィナスは師のヘーリンクにならない、フッサールが直観という「方法」によって、種類を異にする対象の

本性に応じた仕方、意識が己れの対象を認識していく道を開いたということが高く評価することからまずはじめている。⁽⁵⁾しかしながら同じ書を結ぼうとするにあたって、少なくともこの段階で公刊されていたフッセルの諸著作には、「意識の歴史性がその志向性・社会性・人格性と「いかなる」関係」にあるかが問われてはいないとして、主として人間存在の根源的歴史性・時間性への問いの立場から、フッセルの直観理論の「主知主義的性格」と、「理性の超歴史的態度」とを批判するのである。⁽⁶⁾

ここには少壮の彼のフッセル解釈にハイデガーの強い影響が影をおとしているということは明確である。⁽⁷⁾しかしながら、フッセルの哲学に対する内在的批判の形として何よりも注目されなければならないのは、レヴィナスの着眼が就中フッセルの直観の理論の次のような局面に向けられていたということである。

「直観の理論にとつて、理論的意識の優位は決定的な重要性を有する。……直観の作用、われわれを存在と接触させるその作用は、『イデー』が導入しようとした変更にもかかわらず、何よりもまず理論的作用であり、客観化作用なのである。」

しかし客観化作用という概念が言表 (assertion) という問題領域から借用された概念であり、それによってフッセルの直観主義は主知主義によって汚されているのだとすれば、そのかわり判断と知覚とは同じ種類の作用であるということにならうし、人は判断するということのうちに、新たに範疇を形成する働きしか認めず、知覚や名辞と同等の性質しか認めない……⁽⁸⁾」

実際フッセルでは、判断作用と知覚作用、名辞作用とは客観化作用という同じ類の作用に属すとされている。根本的に見て「あらゆる志向的体験は、客観化作用であるか、もしくはそのような作用を基礎にもつ」のであり、「ほかならぬこの客観化作用こそは、他のすべての作用に対して初めて対象性を表象化してやるという、独特の機能をもつ」のである。⁽⁹⁾

他方、客観化作用の作用性質が措定的作用と非措定的作用（存在措定に関して中立化されている作用）とに区分される際、後者をブレントラーノが「純粹表象」と呼んだものに対応させるとすれば、表象という概念は客観化作用という概念に置きかえ可能となり、ブレントラーノの基本命題の威信は損われることなくそのままフッセルの中に保存されることになるという点を、レヴィナスは見のがさない。⁽¹⁰⁾ 結局のところ、

「意識のあらゆる作用の基礎にあると認められている表象——ここにこそ意識の歴史性を危険に陥れ、直観に主知主義的性格を与えているものがあるのだ……」⁽¹¹⁾

このように断定せざるを得なかった当時の段階では、意識の発生論的動態論的分析を示したフッセルの著作⁽¹²⁾は未だ公表されておらず、「体験の実的な成素 (e-reel) の起源 (∴) を探究されるべき生」は、その「歴史的な性格を開示」されるには至っていない。⁽¹³⁾ すなわちこの段階では、総じて志向性は認識をめざす客観化作用、したがって単一もしくは複数の対象を同定する同一化作用（認識）とみなされ、意識の実的な成素についての分析や、そこに含まれるヒュレー的契機についての分析が徹底性を欠いているため、意識が根本的にいかなる歴史的なあり方をして

いるかということが、当時の現象学に対する彼の関心にとって避けて通ることのできない問題となったのである。

レヴィナスの見るところでは、フッセルにとって、哲学的直観としての現象学的還元の遂行は、能動的意識的に認識を行なう理論理性の自由に帰属する事柄ではあっても、それ自身としては単に一種の反復であり、先反省的な仕方では自発的に生きられるものとしての、素朴且つ歴史的な生のうちに何らかの新たなものを創造することではない。⁽¹⁴⁾ この哲学的反省が認識にとって新たな領野を開くとしても、「生に対するその反省は、生それ自身からはたいへんにかげ離れたものである。」⁽¹⁵⁾

ならば一体、このような先反省的な生の営みが生き生きと機能しつつある現在とはいかなるものなのか、そしてそのような生の中で人間が突如自己の素朴性に気づくとはどのようなことなのだろうか、あるいはむしろ次のように考えるべきではあるまいか……

「道徳性や審美性の諸範疇も等しく存在を構成しているのであり、それらの存在の形態と、それらが意識によって出会われる状態とは特殊な構造をもっているのである。確かにそれらは純粹に理論的な経験のうちに絶えず基づけられており……価値対象などの存在の特殊性は完全に独自の種といったものではない。しかし、にもかかわらず、それらのうちには何か「理論によっては飼いならされぬままの」野生的なもの (savage) が存続しているのである。フッセルの思惟におけるこのような因難、もしくは揺らぎを克服する可能性そのものは、実践的な生と価値論的 (axiologique) な生の志向的性格を肯定することと共に与えられるのではなからうか。」⁽¹⁶⁾

——『直観の理論』の最後は、そのような発想の提示によってしめくくられている。

二 『エドムント・フッセルの業績』⁽¹⁷⁾（一九四〇）——ハイデガーとの比較において

しかしフッセルの現象学に対するレヴィナスの評価は以上のようなものに尽きるのではない。また一九四〇年に『哲学雑誌』(Revue Philosophique)に発表されたこの論文でもわれわれの注意をひくのは、フッセルの立場に闕して、それが必ずしもハイデガーのそれと相容れぬものではなく、逆にやはりハイデガーの方法がフッセルのそれなしにはありえなかったのだという点⁽¹⁸⁾が、再度確認されていることである。しかしながらまずはじめに、この著作でも様々な主題をめぐる論述を貫いて、依然として一九三〇年の立場と基本的に同じ観点が貫かれているということに着目しておきたい。

「フッセルの哲学を主知主義と呼ぶとすればおそらく不当であろう。思考を特徴づけるのに、対象の観念よりは意味の観念に優位性が与えられているために、それは許されることではないのだ。欲望や感情の志向性、すなわち端的な欲望そのもの、端的な感情そのものとしての、欲望や感情の志向性は、語の狭い意味において客観的ではない、ある原初的な意味を包蔵している……」⁽¹⁹⁾

この論述は、一見すると以前の主知主義批判の立場とは食い違っているように見える。が、結局は以前の基本的な見解が保持されていることが明らかである。

一九三〇年の『直観の理論』は、フッサールが『イデーン』第一巻、第八五節において「感^{ジン}性^{リヒツカイ}という概念は、広義の、かつ本質的に統一的な意義においては感性的な感情や衝動をも含む」と述べていることをおさえ、感性的ヒュレーの概念が経験論的意味での単なる感性的所与という資格をこえて、感情 (U affective) と意志の領域にまで拡張されていることの意義を正当に把握していた。⁽²⁰⁾ 一般にこの前著の指摘によれば、体験の实的成素である感性的ヒュレーはフッサールの内的時間意識に関する分析が示しているように、すでに一種の志向性——レヴィナスの表現では「より深い志向性」⁽²¹⁾——によって構成された所与である。したがってヒュレー的契機は等しく対象の構成に参与するものなのであり、その意味で、ノエンスーノエマという区分に従うだけでは不十分なのである。⁽²²⁾ ヒュレーは単に形式をもたない素材といったものではなく、すでにある種のより深い志向性によって構成された形式を備えているということ——このことは、「客観化」ないしは「同一化」する志向性として専ら統覚をとらえ、これに対応する形で対象の統一をとらえようとする古い定式の修正を迫っていることになる。したがってフッサール自身の自覚がどのようなであったにせよ、実は上述の引用箇所は、レヴィナスが以前の基本的な解釈をすてないまま、なおもフッサールの現象学とその方法のうちに潜んでいる可能性を評価し、これを活かそうとする姿勢を示しているわけである。

しかしこの時期の特徴としては、フッサールのコギトに対する批判的観点⁽²³⁾が、以前の著作よりも一層濃厚にハイデガールの哲学からの影響を反映しているという点をあげないわけにはいかない。

フッサールにおけるコギトの確実性とは、精神が存在指定に関して自己と外部との諸関係をことごとく中立化してしまう、まさにそのときに見出される精神の状態によって特徴づけられるものである。コギトとは、精神が始まりとして、起源として存在するひとつの状況であるが、その様なコギトの確実性においては、狙われたものと射当て

られたものとは内的知覚を介して十全に合致している。しかしレヴィナスによれば、このような合致はそれ自身、意識に固有のある存在様態から、すなわち「現在（現前）において自己自身をおもひのままに制御できる（matresse d'elle-même）ような存在」から生じてくるものと解されるのである。⁽²⁸⁾ 何となれば、ユギトのうちに含まれる明証的な知とは、元来精神の自由の実現と一体のものであり、意識の自由によって後から根拠づけを得るようなものではないからである。明証的な知は、精神の存在様態としてあらわれる。レヴィナスの見るところでは、要するにフッセルにおいて、自由とは真正なる知のことにほかならない。そしてその意味において、フッセルにとっては自己について以外に知というものは存在しないのである。⁽²⁹⁾ かくして「フッセルの場合には、思考を働かせる以前に思考を支配するいかなる高次の力も存在しない。思考は絶対に自律的なものである」。⁽³⁰⁾ これに対して――

「ハイデガーの場合、私の生とはただ単に、詮じつめれば思考として働く作用であるにとどまらない。私が存在のなかに拘束されるその仕方が独特の意味をもっているのであり、その意味は、ノエシスに対してノエマのもっている意味には還元されえないものなのである。……主体は自由でもなければ絶対的でもなく、それはもはや自己自身を全面的に引き受けるものではない。主体は歴史によって支配され、超出されるが、主体はどうすることもできない……」⁽³¹⁾

潜在的可能性として現象学をとらえる限りにおいて、フッセルの哲学を主知主義と呼ぶことはできないとはしな
がらも、一九四〇年にあらわれた『フッセルの業績』は、右の文脈において、フッセルにおける生の概念が、「詮

じつめれば思考として働く作用」であるにすぎないとし、要するにフッセルの目ざす哲学とは、上のような意味あいにおける「自由の哲学」であると性格づけている。これに対し、ハイデガーの場合には、存在が意味をもっていることを認めながらも、それが「ノエンスに対してノエマのもっている意味には還元されえない」ということに着目している点は、やはり見逃がすことができないであろう。この主張こそは、一九六一年の第一の主著『全体性と無限——外在性についての試論』へと連なっているものなのである。

フッセルにとっては、思考は時間的、歴史的事実としての性格をもつものではあっても、それはあくまでも「受動的綜合」であることをやめず、決してひとつの存在と呼べるものではないという点をレヴィナスは強調する。⁽²⁷⁾ フッセルにおける時間は、専ら精神の自由を成就せしめるもの、意味の思考との親密性、知的活動の自由としての精神の自由を成就せしめるものである。その「時間は精神より先に存在せず、精神が背負いきれなくなるかもしれないような歴史のなかへ精神を巻き込みはしない」⁽²⁸⁾。その歴史的時間はいずれにしても構成されるのであり、歴史は思考によって説明される。ここでは、抽象的な科学の世界の意味が、価値のあらゆる属性をまとった具体的日常的な「超越論的感性論」の世界に依拠しているとしても、具体的な文化的、歴史的、並びに相互主観的な世界の構成は、「理論と自由の時間」として性格づけることのできる内在的時間のうちでおこなわれるのである。

三 一九五九年の諸論⁽²⁹⁾

(a) 時間性と根源的印象の問題

しかしながらレヴィナスの所信では、『論理学研究』以後現象学が辿ってきた道と、それによって示された意識

の深層に関する諸分析とは、必ずしもフッセルが厳密に方法として解していたものとは一致してはいなかった。⁽³⁰⁾すなわちフッセルの後期の思想の問題である。

レヴィナスは一九五九年の著作において『直観の理論』以来主張してきた考えを敷衍し、ついには、「現象学とは表象と理論的客観の破壊である」と言い切る。⁽³¹⁾理論的志向に相関する客観は、客観がそれ自体によって己れを意味しているという幻想をうむものであるという点において、「客観をねらうこと、表象することは、すでに存在を忘却することでもある」。しかし『論理学研究』においてもすでに確証されていたことは、「対象への接近のあり方がその対象の存在そのものを構成する」という事態である。⁽³²⁾このような事態のもとに、一方では学者たちは自らそれとは気づかずに、西欧理性の自己忘却のドラマをかたちづくってきた。しかし現象学者は事物の直観的現前の開けを可能ならしめている自らの構成能作へと回帰することによって、真に事象そのものへと向かおうとするのである。

ところでそのような構成能作、諸々の志向性の織り成されている組織のありさまが認識されるのは、ヒュレーの所与そのものうちにおいてである。ヒュレーの示すその主観的な性格のうちには、あらゆるものがそこから初めてうみだされる根源的な「今、ここ」が暗示されている。一切の構成の原点としてのそのような端的な現在とは、フッセルがその時間論において根源的印象と呼んだものにはかならない。根源的印象は主体の個体化そのものである。フッセルによれば、それは「絶対的な開始であり……根源的発生……創造である」。⁽³³⁾そして「可感的」と呼ばれるもの（感覚の対象）、及びその他の一切のものはこれが変様されたものに他ならない。すでにこれについて、一九四〇年の著作でもレヴィナスは言及していた。

「あらゆる意識の原点とは、すなわち根源的印象である。この根源的な受動性はしかし同時に端初の自発性でもある。これが構成されるとき最初の志向性、それが現在である。……時間は主体の自由に属する運動そのものによって発生せられる……根源的印象という水準において把握された精神のうちでは、自発性と受動性と
の二律背反がとり除かれていることに着目しておこう。……」⁽³⁴⁾

レヴィナスによれば、現象学の思惟の運動は、根源的印象というこのように謎めいた、逆説的ともいうべき事象へとむかう運動として特徴づけられる。現象学的な思惟は、あらゆるものが受容され、かつ発生する自らの根源へと向かう求心的な運動である。そしてそれによってこの運動は、既に構築されたあらゆる体系と全体性からの主体の脱却をもたらす、「背後への超越」、もしくは「逆行的超越」である。⁽³⁵⁾

(b) 根源相印象と運動感覚^{キネメアチゼ}——そして他者

ところで、時間を「構成する」志向性としての感性は、先述のように「理論と自由の時間」を構成するものとざれていたのであるが、それは今のところ、超越論的主観性が対自的に自己の時間を構成するという事態にほかならない。しかしこれとは別に、レヴィナスが一九五九年に主観性の新たな側面として導入しようとしている観点は、主体の身体性の次元に関わる問題としての、身体の方角づけ(orienter)と、対象に対する構えないし態度(*prendre une attitude à l'égard de...*)の運動である。主観性の原点は根源的印象であると同時に、それは運動感覚^{キネメアチゼ}でもあり、⁽³⁶⁾それ故その際の運動と感覚との重なり合いが、一体どのようにして空間を構成するのかが問われなければならぬ。

フッセルでは、あらゆる可感的なものが本質的に運動感覺的である。言いかえれば、悟性の働きをまじえぬものとしての純粹な感覺の対象は、その際の主体の運動のあり方という主観的な契機をその構成契機として常に含んでいる。したがって可感的なものは、器官とその運動とを常に遡示するものであるが、それは、感覺するものとしての主体が、その際の志向性を構成する己れの器官の自発的な運動のなかで対象を感覺する様式として、感覺作用が遂行されているからなのである。運動感覺それ自体は、自由な精神（知性）の眼を介して客観的科学的に自然や世界を眼差したり、反省したりすることにより、対象を構成するのではない。⁽³⁷⁾繰り返して言えば、ここでは運動そのものが端的に運動感覺の志向性そのものを構成する契機となつているのであつて、その対象（志向的相關者）は客観的理論的な志向性（客観化作用、同一化作用）の対象という資格を備えているのではないのである。

要するに運動感覺は「表象」とは異なるものであり、そこでは状況への志向が理論的な志向による「認識」に還元されてしまうことはありえない。というのも、そこではもともと、現象学的反省の眼差しのまえで自我が超越論的領野のうちに完全に透明と化してしまふというような事態、またレヴィナスの言うところの、自我に還元しえぬものであるあらゆる「他者」、他者性が表象のうちに吸収され尽くしてしまうというような事態は不可能だからである。それ故その限りにおいて志向性とは、レヴィナスの表現にしたがうならば、自己の内在の領分で専ら自己触発的に運動するといった自動的、自律的なものではなく、むしろ「他動（移行）的」(transitive)、「行為的」(active)なものである。すなわちそれは本源的に「他動性」(transitive)として、あるいは優れた意味での「行為」(act)として性格づけられることができるものであろう。⁽³⁸⁾そしてそのようなものとしての志向性とは結局のところ、自我の運動感覺を導くものとしての、客観化される以前の他者との関係（理念的には超越的对象ないし

外在性との関係)であるということになるのである。このことは、レヴィナスの思想の核心をなす独特の相互主観性理論との関連において、以後の思想的展開を導くうえでの決定的な点となっているということが指摘されなければならない。

さらにその場合注意されなければならないのは、運動感覚によって基づけられたものとしての志向性は、元來心身の合一として規定されるべきものであるという点である。何故ならば、それは心身の合一の統覚ではなく、心身の合一そのもの、精神の受肉性そのものだからである。⁽⁴⁰⁾

このような異質のものとの統合として、また他者との関係における「他動性」を可能にするものとして、運動感覚はとらえられる。それはまたとりもなおさず、自発的契機と受動的契機とを共に内に含みもつ根源的印象の問題にほかならない。レヴィナスにとって、運動感覚とは根源的印象の枢要な契機であり、根源的印象、運動感覚の問題は、他者問題への通路である。根源的印象の「今」としての私は、能動と受動、自律と他律、内部と外部、主観と客観の対立を超え、あるいは構成された形相と事実の区別、必然と偶然、ア・プリオリとア・ポステリオリの区別に先立つ、ひとつの創造として、個体化である。⁽⁴¹⁾

すでに『直観の理論』以来指摘されてきたような、フッセルにより設定される諸々の定式の偏りと、そこに起因する諸限界とを一つ一つ見究めながら、それを取り除いてゆく作業を重ねることによって、レヴィナスは現象学的分析成果のうちに胎胚していた可能性をひとつの仕方において極限までひき出すことになったのだといえよう。もつともそのような作業の最終的な成果である彼自身の諸定式は、今度は現象学以外の他の思想的コンテクストへの示唆や、文学的なニュアンスをも共に含むような、象徴的な術語のうちに移し入れられていくことがしばしばであ

るため、読者はそれらが遂一どのような現象学的諸分析に由来しているのかを見究めることがむづかしくなっている。しかしフッセルが遺した詳細な諸分析のうちに、上述のような事態を読みとろうとするレヴィナスは、確かにフッセルの現象学的遺産を自らの思索の基盤とし、これをひとつの仕方において深化していったのであると言いうるであらう。

四 『志向性と感覚』（一九六五）をめぐって

(a) 運動感覚と時間性の問題

フッセルにおける生の概念は、一九〇五年以来根源的印象の「今」と結びつけられていたものであり、「生ける現在」という表現は、元来そのような志向性の源泉を言い表そうとするものであった。⁽⁴²⁾それは内的な時間意識の自己自身に対する先反省的な関係を指し示している。すなわちここにおいては、客観化の作用という資格において対象意識でもある意識は、同時に自己自身を体験する、自己についての非—客観的な意識でもある。⁽⁴³⁾

このような事態を理解するためには、例えば事物の射映現象に関する分析が問題となる。射映においては、感覚そのものと対象の性質との間には一種の類似性がある。レヴィナスは、「射映というものはすでに客観化されたアスペクトではなく、内在的に体験される内容でありながら、なおかつ客観的なものをかたどる内容でもある」と指摘する。一般にフッセルにおける直観の作用は、実はまずもって対象に関する主観の内在的な体験内容の現前であり、これを前提として、同時にそのような主観的な対象の現前を客観的に思考する志向性たりえている。すなわち主観性（元来運動感覚的でもある）のうちに見出される端的な対象の現前は思考そのものではなく、それは

未だ思考されてはいない自己の体験内容としての感覚所与に由来しているのである。

これをその際の運動感覚機能との関連に即していうならば、可感的な超越的対象との固有の志向的關係において運動感覚中枢が賦活され、意味を与えられることで、主体にはある運動可能性が与えられることになる。知覚されている体験の実的な成素に対して、この運動可能性は本質的に相対的なものであり、運動感覚は諸々の志向性によって賦活されながら、動機づけとなる。表象はその際、主体の運動とその運動の可能性に応じて構成されるものであるが、空間に関する表象が構成されるに先立って、空間はすでに実的に体験されていたのである。

このように見るならば、主体はまさに「自分が構成しようとしている空間そのもののなかを、〔すでに〕運動しつつある」ことになる。すなわち「主体は自己の置かれている状況に関して抱くことのできる諸表象のうちに解消されないような状況のうちに繋がれて」生きていくのである。⁽⁴⁴⁾

ところでフッセルが時間の概念を記述するのに頻用する時間流という呼称は、過去把持と未来把持を構成する、根源的印象の変様を意味するものであるが、そのような変様こそは、このような現出の相を構成するものにほかならない。すなわちレヴィナスによれば、フッセルが時間流（あるいは体験流）と呼んでいるものは、感覚の上述のような作用のプロセス以外の何ものでもないのである。

端的な感覚作用において、その思考作用（ノエシス）は、自分に先行する対象（可感的な超越的对象、その優れたものが「他者」）に対して、常に時間的に遅れを生起させつつある。しかもこの対象に対して、その思考作用は実は「合致」しているとはいえないのである。志向性のなかを貫いて根源印象的に受容される対象と、思考のはたらきとの間に生起するこのような時間的な隔たりは、本稿第二節において性格づけられたような「意識」のなかで

の総合、取り集めとしては語ることができない。その意味において、流れること、流れ去ることはすでに自我の働きに属する事柄ではないのである。レヴィナスは、共時態(synchronie)を構成する意識の構造とは次元を異にするものとして、このような事態を「隔時態」(あるいは通時態、原語は diachronie)と呼ぼうとする。それは自己自身と意識との絶えざる不一致を示しており、しかもまた、思考が全き立ち止まりと化することなく、流れつつ過去を把持し、未来を把持することを可能にしているものでもある。そしてこの角度から見れば、思考とは要するに、このようにして自己と自己自身との間に距離が生ずるといふ出来事、そのものであるということになる。すなわち思考が、根源的印象の変様としての自己についての内的な時間意識そのものであり、且つ自己が時間化されるという出来事、そのものであるということの意味しているのである。

以上のような事態を要約して、レヴィナスは次のように語っている。

「空間を構成する主体が、根源的印象から出発する時間構成の生成として空間の中を歩むこと：「フッセルは」『時間化するもの (das Zeitigende) はすでににして時間化されている (ist gezeit)』」「と述べたのだ。た。」根源的な反復——これが主体の歴史性の究極の秘密なのだ。そしてこれは、構造的な同時性 (synchronisme) よりももっと強力な Diachronie である。⁽⁴⁵⁾」

こうしてレヴィナスにとって、根源的印象はあらゆる構成能作の源泉とみなされるべきものであると同時に、「意識とは、〔右のような仕方での〕構成する出来事であって、観念論における如くただ単に構成的な思惟なので

はない⁽⁴⁶⁾。ここにおいてわれわれは一九四〇年にハイデガーとの対比において提出されていた、フッサールにおける時間性の概念に対するレヴィナスの批判を想起することができる。以前に見出されていたフッサールの限界と、ハイデガーの思惟から学ばれた事柄とが何であったのかを改めてここに見出すのである。しかしながらこの段階においては、すでにレヴィナスが独立の哲学を打ち立てていることは明白である。

(b) 古典的現象学からの離脱

ところでレヴィナスの立場では、現象学上の諸問題に対する解決の方途としてフッサールが還元を与えてきた重要性をもしまじめに受けとろうとするのであれば、還元がそれとは知らずめざしてきたものは結局、そこから主観／客観、本質／事実、必然／偶然などのあらゆる対立が映しだされてくるヒュレー層のスクリーンの発見にあったと考えざるをえないことになる。何故ならばこのようなスクリーンの発見こそが、還元された意識の中立性 (Neutralität) の意味そのものであると考えることができるからである。他方このことは、フッサールによって『イデー』第二巻で論じられた“Empfindnisse”の分析からも帰結する。すなわちフッサールによって Empfindnisse と呼ばれた身体の「局在化の領野」(Lokalisationfeld) のひろがり、身体と対象との双方を指示するヒュレーの層である(例えば物を握るときの手のひらの感覚は、自分自身の身体についての意識であると同時に、自分が握っている対象についての意識でもある)。それは空間のひろがりを構成する作用とは別のものであり、それに先立って、そのような空間知覚を基づけるものである。知覚はこの層に基づいて空間を構成するが、主観はそれによって単に空間を客観的な仕方では経験する (l'expérience de l'espace) のみではなく、「一種の直接的な反復」によって、その経験は空間の中に生じる (l'expérience dans l'espace) にいたるのである。そのようにして、まことに

ヒュレーの層は、志向性に身体主観的な性格を与えるものであるが、このような論点のうちにもレヴィナスの還元に関する解釈の根拠はあるといえるのである。⁽⁴⁷⁾

しかしこのような論点は、フッセルの現象学の全体的構想に対するレヴィナスの次のような裁決を導くものである。すなわち彼によれば、感覚とは超越論的作業（レヴィナス）の否定であり、起源と一致する明証的現前の否定にはかならないものである。フッセルにとって、それなしでは思惟が存立不可能となるような思惟の起源とは何であったのか……、果たしてアプリアリというようなものが経験となりうるのであろうか……。問題となっている現象学の起源も、結局は根源的印象という、意識のあらゆる構成能作の原点に求められねばならない、という結論がここからは導きだされてくるのである。

しかしながらこのような結論はさらには次のような反問をも惹起せずにはおかない。それはレヴィナスの場合、*Empfindnisse*をはじめとする感性的ヒュレー層は、同時に「他者」との接触をも保証するものでなければならぬからである。——「しかし還元された意識とは、このような「フッセルが考えたような意味での」一次的な、中立化された意識を要求するということに相応したものなのだろうか。本質的に根源印象的である意識は、自我ならざるものによって、他者によって、あるいは「フッセルが見出そうとした最も深い意味での」『事実性』によって遷依（48）されている（*possédé*）のではないのか……。しかしこのような観点は、実はフッセルからのみならず、ハイデガーからも決定的にレヴィナスを離反せしめている観点に連なっているのである。彼は一九五九年の段階で既に次のように述べていた。

「現象学が人格の概念を保持するのは、主体の概念が感性に結びつけられるその度合に依じてである。すなわち個体化の概念が、能動性と受動性との接合点としての根源的印象の両義性に一致し、したがって『今』なるものが己れの構成せんとする歴史的な全体に先行する、その度合に依じてなのである。人格は、己れが構成し、思惟した仕事 (l'oeuvre) のうちに解消するものではなく、常にその手まえで (en deça) 超越的でありつづけている。……」⁽⁴⁹⁾

このことばはフッサールの超越論的作業の立場を否定するものであると同時に、ここにはヘーゲル、構造主義者、そしてハイデガーに対するレヴィナスの否定的姿勢が読みとれる。自己の世界への現前、世界の自己への現前というものは、一定の構造に結晶しおえてしまうものではない。感性の根底にいつも見出される身体性は、主体の石化からの解放であり、人間が運動感覚のうちに心身合一態のもとに歩みを進めることは、そのような固着した構造から解放される自由でもあるからである。⁽⁵⁰⁾

レヴィナスにおける相互主観性理論の境位は、このような仕方において、ア・プリオリとア・ポステリオリ、必然性と偶然性の対立の手前にある、最も深い意味での「事実性」——後期のフッサールが気づいた事実性——の次元に相応すると同時に、古典的な思考形態の有する前提との決定的な相異をはらんでいる。ハイデガーがフッサールの現象学を克服しようとした方向のおそらくは臨界域にさしかかったところで、再びひとつの重要な偏差を修正することによって、レヴィナスは今度はフッサールやハイデガーに共通する「土壌」、すなわち彼の言うところの存在と意識に関する自己同一性 (Je Même) の思想と袂を分かったのである。

五 結語——超越論的目的論の存立基盤への懷疑

一九七三年以来、俄かに盛んとなってきた相互主観性理論の研究を通じて明らかとなってきたことは、フッセルが与えた諸定式の不備にもかかわらず、彼の受動的綜合をめぐる諸分析のうちには、レヴィナスが探究しようとしたヒュレー層の構造を主題化したものが相当量にわたって見出されるということである。わけても、最低次の志向性としての衝動志向性の分析に関して注目される点は、「原初的に流動し、原初的に構成する非—我は、ヒュレーが全体を自身のうちに構成しているものであり、またいつも構成すみのもの、時間化されつつある時間的原生起であって、それは自我の源泉から発するものではなく、したがって自我の関与なくして生起しているものである⁽⁵¹⁾」と述べられていることである。他方、運動感覚のプロセスは根源的に本能的なものであり、その経過は固有の秩序をもつとされるように、後期のフッセルでは、一般に「原キネステーズ、原感情、原本能を伴う原ヒュレーの変転における原構造⁽⁵²⁾」が存在すると想定されているのであるが、これは要するにヒュレー自体がその深層における特定の形式をもつことをフッセルが認めていたということを示している。しかもその場合、フッセルはそのようなヒュレーの構造の形式を、普遍的、目的論的なものとして想定しており、自我や世界の構成は初めから「超越論的生」の目的論的秩序に従って生起するものと考えられているのである⁽⁵³⁾。

しかし超越論的目的論にしたがう、そのような超越論的生のあり方に関していえば、レヴィナスがこれを否定していることは、本稿での諸文献に照らした限りでも明らかである。というのも、たとえ現象学的分析がヒュレーの最も深い層の解明にむかったとしても、フッセルが生をそのようなものとしてとらえている限り、志向性の全体を

通じてあらわれてくるものは依然として「理論と自由の時間」以外の何ものでもありえないだろうからである。⁽⁵⁴⁾

これに対し、レヴィナスの哲学の枠組において、人格ないしは諸々の存在の間の関係が「多元論」(Pluralisme)として規定されていることの意義は、とりわけ重要である。ここに立脚する相互主観性理論にしたがえば、各々の個体化はもはや単一の全体ないし体系——それが神と呼ばれるにせよ、構造と呼ばれるにせよ——を反映する鏡ではない。すなわちこの枠組では、モナドロジーの思想は完全に否定され、各主体は単一の、いわば大文字の存在(自同者)のうちでの多様として動くのではなく、比量不可能な唯一無二の存在として相互に「非対称的」(asymétrique)⁽⁵⁵⁾な関係にあるのである。

ここから帰結することは、レヴィナスの哲学は、たとえ試論の域を出ぬとしても、これまであり得たような自己同一性の論理を超えたところに自らの思想を築いているということであり、したがってそこにおいては、他者との間の相互作用、もしくはそうした相互作用の場としての宇宙に関して、数学的構造を超脱するある種の「先—幾何学的形相」⁽⁵⁶⁾が要請されているということである。筆者の見るところ、フッセルの残した大きな仕事に対してレヴィナスによる現象学的哲学の有している魅力は、まさにこのような発想の妥当性にかかっているのではないかと思われるのであるが、この点に関しては後日の研鑽に俟ちたいと思う。

注

(1) E. Lévinas, *Totalité et Infini, Essai sur l'extériorité* (Nijhoff, 1961). TI と略記。

E. Lévinas, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* (Nijhoff, 1974). AE と略記。

なお以下において本稿で主題的に論じるレヴィナスの論文は次のとおりである。

Emmanuel Lévinas

La théorie de l'intuition dans la Phénoménologie de Husserl, Paris, 1930.

L'oeuvre d'Edmond Husserl, paru dans la *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, 1940.

Réflexions sur la « technique » phénoménologique, paru dans le recueil : *Husserl*, Cahier de Royaumont, 1959.

La ruine de la représentation, paru dans *Edmund Husserl 1859-1959*, Collection Phaenomenologica, 1959.

Intentionnalité et métaphysique, paru dans la *Revue philosophique de la France et de l'Étranger*, 1959.

Intentionnalité et Sensation paru dans la *Revue Internationale de philosophie*, Bruxelles, 1965.

- (2) *Sur les "Ideen" de M. E. Husserl*. *Revue philosophique de la France et de l'Étranger*, n° 3-4, mars-avril, pp. 230-265.

- (3) この論文の重要性と意義に関して、合田正人氏『レヴィナスの思想』（弘文堂、昭和六三年）の所説に負って従って、⁵⁹ 本書四六頁参照。Vgl. *Husserliana* Bd. I, S. xxiv.

- (4) *La Théorie de l'Intuition dans la Phénoménologie de Husserl*, Vrin, 1978. 以下 THI と略記。

- (5) THI, p. 11.

- (6) *Ibid.*, p. 221.

- (7) *Ibid.*, pp. 14-15. レヴィナスは自らそれを認め、かつハイデガーの哲学的生涯はワッセルの哲学の輪郭を明確にするのに役立つと述べている。学生の頃よりレヴィナスがハイデガーの哲学に強く魅せられていたことは既に周知のことである。⁶⁰ 例として Salomon Malka, *Lire Lévinas*, Cerf, 1984, p. 97 参照。

- (8) THI, pp. 99-100. Cf. THI, p. 97. 傍点部の原文はイタリック。

- (9) Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen*, II, 第五研究「第四一節。邦訳『論理学研究 3』二九五—二九六頁。

- (10) THI, pp. 96-97.

- (11) *Ibid.*, p. 221.

- (12) 例えば一九三九年に出版された『経験と判断』を参照。しかしこの書においても、方法論的限定という名目のもとに生活世界の歴史性、生活世界の実践的様相における判断、そしてとりわけ共同主観的関係のもとにおける経験と判断の間

- 題が排除されている。
- (13) *Ibid.*, p. 220.
- (14) cf. *Ibid.*, p. 222.
- (15) *Ibid.*, p. 203.
- (16) *Ibid.*, p. 223. []内の説明は筆者。
- (17) "L'oeuvre d'Edmond Husserl." *En discourant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Vrin, 1982, (以下 DEH と略記)所収。邦訳『フッサールとハイデガー』丸山静訳(せりか書房、昭和五二年。)
- (18) DEH, p. 52. Cf. THH, p. 11.
- (19) DEH, pp. 23-24.
- (20) THH, p. 68.
- (21) *Ibid.*, p. 78.
- (22) *Ibid.*, p. 78, 199.
- (23) DEH, p. 46. 引用語句中の傍点は筆者。
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.*, p. 48. 邦訳九四—九五頁。
- (26) *Ibid.*, pp. 48-49.
- (27) *Ibid.*, p. 49, 52.
- (28) *Ibid.*, p. 42. 邦訳八一—八二頁。
- (29) ここでは註(1)で挙げた一九五九年の三つの論文、すなわち『現象学の《技法》についての反省』、『表象の破壊』、『志向性と形而上学』をとりあげる。これらも一九六五年の論文とあわせ、DEHに所収されている。以下、『反省』、『破壊』、『形而上学』と略記。
- (30) DEH, pp. 111-112 (『反省』)参照。
- (31) *Ibid.*, p. 114.

- (32) *Ibid.*, pp. 114-115. Cf. *Ibid.*, pp. 133-135, pp. 145-146.
- (33) V., *Ibid.*, p. 118.
- (34) *Ibid.*, pp. 41-42. 『フッサールの業績』第一一節「自我と時間と自由」より。しかしなおこの場合にも、時間は本質的に構成されるものであるが、ただしその背後にいつそう深遠な主体があると考えられていると誤解されてはならない。
- (35) *Ibid.*, p. 119.
- (36) DEH, p. 141 (『形而上学』)。
- (37) これはフッサールがその晩年において、「運動感覚〔そのもの〕は意志の様態に属すのではなからず」(*Husserliana* Bd. XV, p. 330.)と述べていることと符合している。
- (38) 第一節で触れた、素朴な生ががいつつある先反省的な生のあり方に対するレヴィナスの見方を参照。レヴィナスはこのようなあり方をアルフォンス・ドゥ・ヴェーレンと共に「非—哲学的経験」と呼び、むしろその積極的な価値を評価する。V., AE, p. 154. またここでは、「レヴィナスによつて言及された「より深い志向性」(本稿第二節参照)の問題を想起された」。
- (39) DEH, p. 140, 143. 後の著作で「レヴィナスはこれを「他者—触発」(*l'hétéro-affection*)と呼んでいる。たとえばAE, p. 189. 参照。
- (40) DEH, p. 142. なお上述のような論点に関して、ラントグレーベの論文による所説とのある種の類似点が着目されよう。例えば、「L・ラントグレーベ」『フッサールの構成論についての反省』(一九七四)(邦訳『現象学の根本問題』見洋書房刊所収)参照。
- (41) V., DEH, pp. 119-120. Cf. *Ibid.*, p. 155. 『フッサールの構成論についての反省』邦訳七四、七七頁参照。
- (42) DEH, p. 152, note 1.
- (43) *Ibid.*, p. 149.
- (44) *Ibid.*, pp. 158-159.
- (45) V., *Ibid.*, p. 160. G・ブランド「世界、自我、時間」より引用されている(「」内の補足は筆者)。
- (46) *Ibid.*, p. 154. 「」内の補足と傍点は筆者。

- (47) *Ibid.*, p. 157.
- (48) *Ibid.*, p. 162. 「事実性」の問題については、ラントグレーン『フッサールの構成論についての反省』前掲邦訳書七五—七七頁、及び同編訳書所収の『事実性と個体化』参照。cf. AE, p. 109: "...dans une contingence, exchant l'apriori."
- (49) *Ibid.*, p. 120 (『反省』)。
- (50) *Ibid.*, p. 162 (『志向性へ感覚』)。
- (51) 遺稿 (C10, 1931) 二五頁、山ロー郎『他者経験の現象学』一二〇頁より引用。以下、フッサールよりの引用および邦訳は同書に負ふ。
- (52) *Husserliana* Bd. XV, p. 385. 邦訳は前掲書一〇六頁より。
- (53) 山口前掲書一〇七—一〇八頁参照。
- (54) Cf. AE, p. 109, 178. Cf. *Ibid.*, p. 105. 実際がレヴィナスは究極において目的論を否定している。
- (55) V, AE, p. 89: "relation à travers une différence absolue qui ne se réduit à aucune relation synchrone et réciproque qu'y chercherait une pensée totalisante et systématique... : ni structure, ni interiorité d'un contenu dans un contenant, ni causalité, ni même le dynamisme, lequel s'étale encore dans un temps ramassable en histoire."
- (56) AE, p. 152, note 22.

付記 本稿は第十三回大阪カント・アーベント(一九八八年十二月十一日、大阪大学待兼山会館)で口頭発表した草稿をもとに執筆したものである。

(大阪大学博士課程)